

ずいそう

憧れの北の大地

飯田 宏



思い返せば幼少の頃から北海道に憧れを抱いていた。念願かなって初めて訪れたのは大学2年の夏である。大学のバイク仲間であった3人で敦賀からフェリーに乗った。当時は片道30時間程の航海だったと記憶している。早朝の小樽に上陸し、すぐに札幌に移動、テントなどの装備補充を行った。約1週間の旅程で、巡るルートを決めていたわけではないが、とりあえず最北端の宗谷岬を目指した。既に30年以上経つが、当時のことをよく覚えている。一泊目は旭川手前のキャンプ場で地元の方とお酒を飲みながら夜更けまで語り、翌日はノシャップ岬を経由し、宗谷のライダーハウスに泊まった。最北までたどり着いたので、次の目標を網走とした。しかし、北上する時はひたすらまっすぐの一本道でも楽しかったのだが、南下し始めるとさすがに飽きてきた。景色が変わらないのにしびれを切らし、途中で山道に入るという、気ままな旅である。3人ともトレールと呼ばれるオフロードバイクに乗っていたため、未舗装の林道を辿りながらの移動はスリルもあり、心踊らされた。3台いると、さながらラリーのような感じになる。阿寒湖・摩周湖・屈斜路湖に立ち寄り、近くの林道を登った峠で雲海の上に出た素晴らしい景色が最も記憶に残っている。3人で写真を撮りまくった。その後、東の端に位置する納沙布岬までたどり着いたあたりで、帰りのフェリーの時間を思い出すという計画性のなさである。そこから小樽までは一気に走り切り、何とか帰りのフェリーに間に合った



写真—1 林道での愛車（トレール）

と記憶している。初北海道はただひたすら走っただけなのだが、バイク乗りの聖地として、申し分のない良い思い出となった。

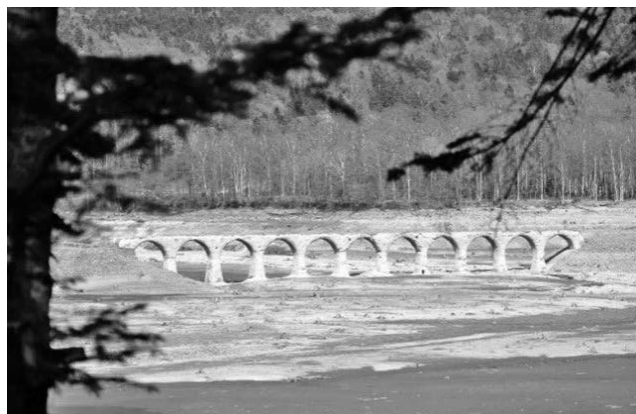
2度目は、大学の級友との卒業スキー旅行で訪れたニセコであった。それまでは関西近郊のゲレンデがメインであった自分たちには、極上の雪がスキーの腕前を磨き上げてくれたと感じた。朝からナイターが終わるまで、ニセコのゲレンデを堪能しつくした。ただ、内地に戻ってみると腕前はあまり変わっていなかった。雪が全てを美化していたのである。

3度目に訪れたのは、会社に入った2年目の盆休みであった。学生時代と違い、盆休み限定ではフェリーの手配は難しく、予約できなかったため、とりあえず陸路で青森港に向かった。相変わらず計画性がない。青森港で予想を超える1日半の足止めを食らうことになる。函館への上陸までは大学時代のバイク仲間と2人であったが、そこからソロツーリングになった。確か相方は道北に行きたいが、私は前に行けなかった南方に行きたかったので、バラバラになったと記憶している。喧嘩をしたわけではない。北海道ではソロツーリングをしていると同じようなライダーと信号に捕まるたびにどちらともなく言葉を交わし始め、そのうち意気投合し、一緒に宿泊先を探すことに発展することもある。変な縁が生まれる。これも北海道ならではの感じる。しかし、ソロツーリングも悪くはないが、仲間がいた方が更に楽しいのでは？と感じ始める。最終日前日に函館で相方と合流し、近所で買いたいかをあてにお互いの道程を語りながら酒盛りした。帰りのフェリーは函館に着いた直後に予約をしたので、無事に乗船できた。今思えば変な旅である。

4度目は長期出張で札幌に半年程度住むこととなった。3度目に北海道を旅した数週間後であった。そのまま滞在しても良かったのではないかと考えたものである。この時は北海道の冬を越したが、バイクでもスキーでもなく、変わってスノーボードに明け暮れ、スノーボードが結構上達した。週末、暇なので1人でスキー場に行くことが多かったが、ふかふかのパウダースノーは1人で滑っていても寂しさを感じなかった。ニセコスキー場がホームゲレンデとなり、雪道の運転

も楽しめるようになっていた。雪まつりの時期には大通り公園で作られていた雪像の進捗を確認しながら現場まで通っていた。まつりが終わるとすぐさま雪像がバックホウで雪の破片にされていくのを見て、祭りのあとの寂しさをしみじみ感じた。北海道での工事も竣工を迎え、雪が解け始めた春先に後ろ髪を引かれるのを感じながら内地に戻った。

その後は行ったり来たりを繰り返し、そのうち、札幌にある豊平館（重要文化財）で式を挙げていた。その年末には旭岳をスノーボードで走破する計画を埼玉の友人と立てたのだが、直前に同行予定の友人がけがをしたため、1人で挑むこととなった。災難は続くもので、当日、ロープウェイが運休となり、駅で待っていた10数名の人たちと自力での「登り」に変更した。一人また一人と離脱され、視界が開けた山の中腹までたどり着いた頃には数名になっていた。寒さは感じなかったが、腕時計の温度計が計測不能になっていた。後で調べると-10℃を下回ると計測できないことが分かった。やはり、相当気温が低かったのである。結構な時間をかけた登りで疲れも感じ始めたことから、板を付けて戻る（降りる）ことにした。滑るというより落ちるという感じの滑走はあっという間に終わってしまった。膝から腰くらいまでである新雪で、止まると埋もれてしまうため、休憩することができなかったためである。翌日も天候が悪く、諦めて第2の故郷となった札幌に帰った。ここまで思い起こしてみると、北海



写真—2 タウシュベツ川橋梁

道限定であるが、20代までは無茶苦茶な旅ばかりしていたことに気付く。

以前、糠平湖のタウシュベツ川橋梁について原稿をお願いしたことがある。仕事柄、気になる構造物であり、現地を訪れたこともあったことからお願いをした。その他にも北海道での思い出は数多くあるが、毎年1～2度は訪れる北の大地への憧れは、今も継続中である。ほぼ全域を訪ねているのであるが、北海道の離島をはじめ、行きたいところは尽きない。ただ、初めて訪れた際に感動した雲海の上で撮りまくっていた写真は、記憶にある景色ではなかった。心に残る景色は意外と写真には残せないをつくづく思う。

——いいだ ひろし (株)ドラムエンジニアリング
エンジニアリング事業部 技術グループ 部長——